

UIFA JAPON NEWSLETTER

■主な内容

- UIFA JAPON 2001 年度 第 9 回総会報告
- 記念講演会報告
- 第 13 回 UIFA 世界大会報告
- 世界の女性建築家の魅力と迫力
- ウイネルワルドを望むギャラリー
- ウィーン建築の魅力堪能して
- 会員になる最大のメリットを経験して
- 海外交流の会報告
- モンテッソーリの幼稚園見学
- ユニバーサルデザインを考える「ロービジョンの人たちのために」
- UIFA会員の本
- 役員会報告



総会風景

■UIFA JAPON 2001 年度 第 9 回総会報告

UIFA JAPON 2001 年度第 9 回総会が開催されました。ウィーン大会を目前に、地方での核づくりなど、より活発な活動へ向けての総会となりました。以下の議案について審議が行われ、いずれも原案どおり可決・承認されました。

- 日 時：2001 年 6 月 9 日（土） 13:30~14:15
- 場 所：弘済会館 4 階会議室「桜」
- 出席者：委任状含み 75 名（定足数 59 名）
- 開会宣言：小川信子副会長
- 挨拶：中原暢子会長（本総会議長）
- 議 事：第 1 号議案 2000 年度の活動と収支報告・監査報告
- 第 2 号議案 2001 年度の活動計画案と予算案
- 第 3 号議案 会則の改正等
- 議事内容：第 2 号議案 2001 年度の活動計画案と予算案
- 総務・財務 2000 年度収支報告及び監査報告
- 2001 年度予算案の作成
- 毎月 1 回役員会の開催
- 事 業 第 24 回（4 月）、第 25 回（5 月）、第 26 回（11 月）、計 3 回海外交流の会開催
- 広報・渉外 第 47~50 号計 4 回 UIFA JAPON Newsletter 発行
- その他会員に 「この指とまれ」 施設見学等開催予定
- よる活動 クロアチアの本「建築の理論と実践における女性の研究」翻訳（月 1 回）の継続
- ：第 3 号議案 会則の改定として、ヘア会員、学生会員、名誉会員を追加（田中）

■UIFA JAPON 2001 年度 通常総会・記念講演会報告

「Environment of Aged Life— これからの高齢社会と居住環境」

徐 華

6 月 9 日に、2001 年 UIFA 総会が盛大に開催されました。その記念講演として、東京大学教授の長澤泰先生が「Environment of Aged Life—これからの高齢社会と居住環境」というテーマでお話をされました。長澤先生

は、欧州や北米の大学等と幅広く交流を深めながら、医療・福祉施設の計画理論を専門的に研究しておられます。

まず日本、アメリカ、ヨーロッパ諸国の簡単な保健福祉統計から話が始まりました。フィンランド、アメリカ、日本の高齢者施設の実例紹介を皮切りにし、Aged Life とは何かという話題が展開されました。御承知の通り、健康は Aged Life に大切なことです。長澤先生は WHO が現在掲げている健康に関わる定義を取り上げ、Physical, Mental, Social, Spiritual という 4 つの面において、ユーモアを交えながら、分かりやすい事例を用いて健康概念を説明してくださいました。

次に、ユニバーサルデザイン、すなわち障害の有無、年齢・性別・体格に関わらず最大限に利用できるデザインについて、世界諸国から集められた事例の映像と共に、柔軟性を持つ使いやすいディテールを紹介されました。特に視覚障害者用の触覚地図、ベッド生活の人を考えた天井画等は印象的でした。細やかな心遣いによって、人間に優しいデザインのアイデアが出てくるのではないかと触発されました。

最後に長年にわたって研究されている病院の話を用いて、今後の展望として、Small scale Building, Natural Circumstance, Human Relationship 等が重要であること、そして自然に融合し居心地よい癒しの環境をデザインすることが望まれると述べられました。

先生は講演会の最後に「ノー天気は長生きの秘訣」というジョークを交えて、我々が真剣に考えなければならぬことは何かを提起されました。

勿論癒し環境の質は、研究や設計に携わる人々の努力で建物や設備と言ったハードの面が向上していますが、ソフトの面としては、どのような人にも寛容で精神的に豊かな環境を作るといふ考え方を普及させることも重要ではないでしょうか。日進月歩の医療技術、科学技術は、果して愛と帰属感、美の追求など人間の基本的要求を満たすことができるのでしょうか。より深いコミュニケーション、自然との共生、精神の充実等はこれからの高齢社会と居住環境には大切なコンセプトではないでしょうか。

世界の女性建築家の魅力と迫力

柳澤 忠 (名古屋大学・名古屋市立大学名誉教授)



7月1日から6日間にわたり、Before and After the Active Life というテーマで UIFA 第13回ウィーン大会が開催されました。参加者は 39 カ国から約 140 名、発表数 25、展示数 25 でした。日本からの参加者は 30 名 (うち非会員 2 名、同伴者 5 名)、発表・展示は各 6 題、7月7日から9日にかけてのポストコングレスツアーの参加は 20 名という多勢でしたので、セッションや見学会には日本語の通訳をお願いしました。また、1998 年の日本大会の印象がよほど強かったのか、海外の会員から「日本大会は本当に楽しかった」という多くの賛辞をいただきました。日本大会で知り合った方々との再会や新たな出会いを楽しみ、セッションや展示で学び、ウィーンの主要な建物を見学し、ワインや料理を味わい、という実に盛りだくさんな大会でした。詳しくは後のページを読んでいただくとして、ここでは簡単なスケジュールのみご報告します。

- 1日：登録、展示準備、ウェルカムパーティー。
- 2日：開会式、展示オープン、ウィーン市内見学、市庁舎ホールでのオーストリア女性建築家作品展見学、市庁舎中庭でのカクテルパーティー。
- 3日：終日セッション、夜はグリーンツィングでディナー。
- 4日：見学会 (MQ、ツインタワー、フックス美術館、シュタインホフ教会、ゼセッション館) 夜はウィーン建築家協会にてカクテルパーティー。
- 5日：午前セッション、午後自由時間、夜事務局会議。
- 6日：セッション、閉会式、午後見学会 (シュタインホフ精神病院改築工事、市内の老人病院)、夜は晩餐会。
- 7日～9日：ポストコングレスツアー (メルク、ザルツブルグ、パートイシュルなど)

(広報：田中)

女性ならではの今日的テーマ

全体でわずか 5 - 6 名だった男性同伴者の 1 人として大会に参加させていただき、大体の発表を聞かせていただきました。ザルツブルグ旅行にも参加し多くの友人が出来たことを喜んでいます。最初は殆ど 1 人でウィーンの街をうろついている積もりでしたが、多くの国の女性建築家の迫力と魅力に引きずられて、真面目な大会参加者になってしまったと自分では考えています。

同じ職業の女性が国を超えて集まるということが、他に例 (医師とか弁護士とか) があるのか知りませんが、どんな意義があるのか私なりに考えて見ました。「建築は生活に密着した (密着すべき) 専門職でありながら、不当に男性が占有していた専門職である。これを打開する為に、国際的に情報を交換してレベル向上を計る必要がある」ということでしょうか? 最近、ヘルスケアデザインとかユニバーサルデザインなどの国際会議の参加者は、多くの場合女性が過半数を占めています。癒しの環境デザインや高齢者・障害者対応の環境デザインなどは、生活体験の豊富な女性がリードしてくれないといけないことを反映しています。その点で第13回大会が子供や高齢者に注目しようとしたのは良いことだと共感しました。

実際の発表を聞く限り、あまりテーマに拘束されずに多彩な発表がありました。特に研究的な論の展開というより、身近で生活に密着した問題発表に興味をもてました。日本グループはテーマが具体的で内容も豊富であり、国を超えて関心が持たれたと思います。住宅関連 (子供部屋や太陽熱利用など)・古くなったニュータウンの再開発・難聴者配慮の音楽会場計画などが分かりやすかったので印象に残りました。

男女を問わず応援団を増やしたい!

しかし、発表会場の環境が暗転不十分であったことは、建築系の発表としてはまずいことでした。素晴らしいウィーンの森に接して住み心地の良さ満点のホテルでは、会議場の技術的な環境が得られないのは仕方がなかったのかも知れませんが、最近の国際会議のプレゼンテーションの素晴らしさから考えて残念でした。従って印象に残った発表は悪い条件の中で、プリントを配って説明された発表とか、単純明快な OHP を使った発表などでし



ウィーンを中心部の商店街 歩行者天国で清潔で安全な街



ホテルのテラスで ウィーンが一望できるすばらしい眺め

た。私はデザイン系などに比べて建築系のプレゼンテーションが不十分なことを日頃苦にしていたので特に気になりました。

今後さらにテーマ性を明確にして、女性専門家からの一般社会に対する提案やアピールをまとめて欲しい。これから大会発表をまとめてどんな印刷物を作るのか？ホームページはどうなっているのか？事務局を強化出来ない経済状態では無理な相談かも知れませんが、少なくとももっとジャーナリズムに働きかけて欲しいし、男女を問わず応援者を増やして欲しいと思いました。

§ 第13回UIFA世界大会 ウィーンからの報告 2

ウインネルワルド(緑の森)を望むギャラリー

中野晶子

お城の廊下が「現代建築のギャラリー」に

お城(ウイヘルミネンベルグ)は、深い森の中の小高い丘の上にあります。一望のもとにウィーン市街を眺められるこの場所で会議が開催された事は、参加したメンバー一人一人にとっての至福の時間をもたらしてくれたように思います。

そのお城の2階(ヨーロッパでは地上階の次の一階と言う)に細く長い廊下があります。安定した光が一日中降り注ぐこの廊下に、各国の建築界で活躍していらっしゃる方々のパネル展示が「つづら折り」のように飾られました。細いと思ったのは錯覚でした。天井高が有に6~7メートルあり、その縦長のプロポーションに誤魔化されたからです。一間半以上恐らく3m位の幅が合って、パネルを見るのにも私達の行き来にも問題ありませんでした。その当時の、長くふくらんだ裾のドレスを着こなした御夫人方が



展示風景

すれ違っても支障がないように、ゆったりと設計されたのでしょう。

パネルはソランジュ会長のフランスを始め、ベルギー、ルーマニア、デンマーク、スロベニア、ハンガリー、ドイツ、アルゼンチン、韓国、中国、日本等からそれぞれ複数の参加があり、この廊下の雰囲気をつっかり「現代建築のギャラリー」に変貌させていました。中には、98年の日本大会のオマージュでしょうか、思い出の日本的なシーンをパネルにレイアウトして、前回の会議の関係者に感謝の意をソット表している洒落た心意気のパネルもありました。

私はこの展示を最初に見て、力のある人々が沢山いるのに勇気づけられました。その中から、お声をかけて、設計主旨を聞きたくなるような作者に会える事が楽しみになりました。控えめなハッキリとした主張があつて、形が優しい。曲線の扱いはさすがに、ヨーロッパの人達はアーチ構造の歴史を体現しているだけあつて無理がなく、品があつて美しい。特に洗練されたデザインを感じたのが、ハンガリーのマリア・ベオティーさんの体育館。デンマークから来たアリスの幼稚園には、賢明な空間構成力と光の美しさを感じました。韓国の女性達もハウジングでパワフルな活動を展開していました。レクチャーを聞いてもっと内容に肉迫したかったのですが、ウィーンの街を見たいという誘惑にも負けてしまいました。

ウイヘルミネンベルグ城の小史をホテルの支配人から頂いたので、抜粋して御紹介しておきます。

1781年 モリッツ伯爵が土地を購入、城の建築はじまる。ウィーン駐在ロシア大使ミカロウイチ男爵の手に移り、池、教会、狩猟小屋、当時はやりのにせ廢虚が作られ、市より差し出された廻りの森と共に公園として市民に開放されました。数代の所有者が替わり、1838年モンテラート男爵夫妻の代に補修をし、両サイドに増築。息子の代で一度競売に出されたものの、結局その妻に贈与。土地だけ確保して財産は投げ出した。ウイヘルミネは彼女の名前。

1895年 ハブスブルグ家の王子フェルジナンド(暗殺されて第一次世界大戦のきっかけとなる)が城の所有者となり、ダンスホールが設けられた。1918年~34年 城は市の所有となり、傷病兵の病棟、子供の家として活用。45年以降は廢虚となる。1988年~ 全面改修後、ホテルとして復活。

ウィーン建築の魅力を堪能して

峯 成子

石の文化のすごさを実感

見学会の1日目は7月2日の午後で、中心街のリング通りを巡りながら建物の説明を聞く。石畳を歩いて入ったのはモーツァルトが住んだことのあるアパートで、1階の吹き抜けでタイムスリップ感を味わいつつ説明を聞いた。市のシンボルというシュテファン大聖堂も中に入り、ゆっくり見学した。1147年に建築されてから長期に様々な様式を混在させながら改築されているというが、外観は見事で137mの尖塔が威容を誇り、大屋根の色瓦による鮮やかなモザイク模様が目を奪う。薄暗い内部は彫像を伴う丈高い列柱がズラッと並び色調美しいステンドグラスは、眺め飽きない感がある。その他、広い王宮を駆け抜けるように眺めてオペラ座前で見学終了。大半は様々な建物の外観のみだったが、何世紀も前の建物が厳然と立ち並ぶ光景に、石の文化のすごさを見る思いで圧倒される感を抱いたし、建物の各所や広場にやたらに見事な彫像が多いことに、文化の違いを感じさせられた見学だった。

7月4日の見学は一日。まずは王宮奥の美術館地区。元乗馬披露用の建物を改装し、両脇にブラック・ライト・ストーン使用の白黒の新たな建物を配している。内部の一部や裏側の芸術家工房や住宅を外から見学した。その後、市南部の再開発地区のツインタワーに行く。三角の敷地に37階138mと34階126mの明るい直方体が一寸角度をずらして接合された建物。36階まで直行し、テラスへ出て三方を巡りながら説明を聞く。眺望は壮観だった。

午後は元オットーワグナーが別荘とした家(現在はフックスミュージアム)でちょっと外観に驚く。内部は中央広間から左右へ段を降り天井の高い寝室・他室へ入る造りで空間構成には魅力があったが、インテリア他がかなり変えられているようで、元のものが見たかった感じだった。

その後はオットーワグナーが手がけた郊外の精神病院へ行き、アムシュタインホーフ教会を見学する。外部は補修中だったが内部は非常に明るく、祭壇・壁画・ステンドグラスは白が主調でさっぱりし、細部は凝っているが重苦しくない。弧を重ねた窓・天井のデザインは目に心地よい。

最後に行ったのは、屋根上の月桂樹の葉をデザインした金色の玉が目を引くセセッション館。内部のクリムトのフレスコ画“ペーターベンフリーズ”は現地で見られない貴重な見学だった。

会員になる最大のメリットを経験して

谷村留都

ウィーン大会にひかれて会員に

今年の3月、名古屋遠征の会に参加した時、「会員になる最大のメリットは大会に参加することよ!」との松川さんの一言に「なにウィーン大会!」と単純な発想で会員になりました。団体旅行が苦手な海外に行くのなら1都市に1週間は滞在し、ただ観光をするだけでなく、その町の人々の暮らしや文化に触れたいと決めている私にピッタリの企画でした。どんな人が参加されるのか、まったく知らないまま一人で申し込みましたが、そんな危惧は必要ありませんでした。

セッションの後のちょっとしたブレイクタイムやパーティの時、最初は一体誰に話し掛けてよいのやら戸惑いました。他の人達は顔見知りを見つけて、楽しそうにおしゃべりしているのにと、羨ましく眺めていました。けれど毎日、同じホテルで顔を合わせたり、見学会の時のちょっとしたきっかけで声をかけたりと些細な機会があると、次にあったときは、ウインクしたり手を振ったりして、気さくに接することが出来、とてもうれしくなりました。けれど、どんな国の、どんな事をしている人たちが参加するのかわからず、心の準備が何もなかったのが残念で、もっといろんな国のことを勉強して話題を自分で提供すれば会話が盛り上がるのにと痛切に思いました。

オットーワグナーの建物を大切する人たち

会議のちょっとした時間を利用しての市内見学はとても楽しみでした。最初の日はあいにく日曜日で開いているのは、教会と美術館くらいでした。こちらはカソリック信者が多く観光地でもほとんどの商店は日曜日はお休みです。でも私にとって旅行の最大の楽しみは一人で地図を片手に気ままにぶらつくことなので、ミサに参加したり目星をつけておいた美術館に行ったりと有意義でした。その後、1日券で乗り放題の市電で街の様子をざっと見て、オットーワグナーの郵便貯金局を確認しました。この建物だけは是非見たいと思っていたので、後日訪れましたが、想像していた以上に美しく、感動しました。

ウィーンの人々は建築家に限らず、オットーワグナーの建物を大切にしていることがわかりました。最後のセッションでウィーン工科大学の関係者の発表でアーチ型の鉄道高架の再利用のプロジェクトがありました。発表者を探してその場所を聞き出し、地図を頼りに見つけた時は、通常の旅行では考えられない喜びがありました。

モンテッソーリ幼稚園見学

岡村珠穂

親子3人での参加

涼しげな木陰の歩道を抜けていった先の小さな丘のようなかわいらしい建物が、幼稚園とは誰もが思わないでしょう。エントランス正面の2階部分に当たる窓には青い地球をモチーフにしたステンドグラスがあり、この建物の中でどんな創造の世界が繰り広げられているのだろうと、建物に入る前から私は胸踊らせていました。私にも1歳半になる息子がいます。「子供の可能性や自発性を伸ばし育てる」というモンテッソーリの教育法に興味を引かれ親子3人で参加しました。私達の他に2、3組の親子を含め40名ほどの方々が参加していたようです。

見学会は幼稚園の理事長である高根澄子さんのゆっくりとした優しい口調で始まりました。「子供とは何をするかわからない危ないものだと決めつけ、大人はどれだけ子供が自分を作ることの邪魔をしているのか」「全世界に様々な人種の人間がいるのと同じように大人と子供という種類の人間が存在していて、大人の考えている世界と、子供の考えている世界は違うのだということを受け止めるべきである」「大人は社会・環境を作るのが仕事であり、子供はその大人の作った環境の中で自分を創るのが仕事である」「子供はその環境の中で一番敏感に反応することから発達していくので、今一番敏感に反応していることが何なのか、大人は子供をじっくり観察しなければいけない。その敏感になっている時期に、夢中になれる環境を与えてやるのが子供にとって一番大切なことである」など、高根さんが保育に携わり始めた当時の保育の状況から、現在に至る幼児教育について、様々なお話をお伺いしました。1つのクラスは3、4、5歳の子供の10名程で編成されており、それぞれの部屋には、日常生活の空間、感覚を養う空間、数を養う空間、文化の空間、地理の空間があり、たくさんの手作りの教具が並べられていました。かわいらしい教具には誰もが思わず声を上げ、目新しい教具に思わずため息が漏れ出ました。その部屋の中で子供達は自分の興味のある教具を引っぱり出して自分づくりに毎日励むというわけです。また、年上や年下の集まった縦割りのクラス編成が、社会の中での協調性や思いやり、助け合いの心を育ててゆくというのです。

居心地のよい色使い

このモンテッソーリ幼稚園を設計なさった西野雄一郎氏は、色に一番気を使われたとのことでした。床の色は、



幼稚園の外観



見学風景

汚れに気づくように白木に近い色のフローリング。壁は薄いサーモンピンク。これは子供達が安心して色なのだそうです。生まれたばかりの赤ん坊は、母親のお腹の中にいたときの色を近くに感じると、安心してそうです。大人になるにつれて緑や青に近い色に安心感を感じ、年老いて再び赤に近い色に安心感を抱くとのこと。私達にとっても、とても居心地の良い安心する色使いの空間でした。また、照明は間接照明を多く利用していました。手先の細かい作業をするとき以外は、トップライトからの自然光でほとんど一日過ごせるように考えられていました。大きな八角形のトップライトの室内側には障子をはめてあり、柔らかな光が部屋全体に広がっていました。始めに、高根さんは建築という物的なものの力を借りて、子育てに奉仕しているのだとお話されていましたが、この建築は自分を創ろうとしている子供達の為の十分な環境づくりのお手伝いをする、まさに生きた器であると感じました。

一緒に参加された方から、「知的障害を持った子供は小学校へ上がる時、現状の学校教育の中では必然的に特殊学級に行かせられてしまうが、子供にとって決して良い方法であるとは思えない。何か他に良い方法がないか悩んでいる」という質問がありました。それに対して、高根さんは、「どんな子供も時間がかかる、かからないの差が多少あるだけで、全く希望が無いことはない。障害を持った子供には特に長い時間かけて根気よく接することが大切であり、すべては愛を持って受け止め、見守り接してあげれば、その子供は立派に自分を創ることが出来る」とお話下さいました。

子育てに対する様々なもやもやが一度に晴れ、とてもすがすがしい気持ちで、このモンテッソーリ幼稚園を後にすることが出来ました。

「子供が自分で何か言いたいときに言えるように。何かやりたいときにやりたいことが出来るように、周りの大人は大人の都合や身勝手さを捨てて、もっと開放的になる必要がある」ととても印象に残った言葉です。

〒102-0083 東京都千代田区麹町 2-6-5
麹町 E・C・K ビル 暮らし構造研究所内
TEL 03-5275-7861 FAX03-5275-7866
メールアドレス uifa@LIQL.CO.JP

ユニバーサルデザインを考える

ロービジョンの人達のために

山田規矩子

“ロービジョンって何?”というタイトルの講演を聴いた。視覚障害者といえば、白い杖をついた全盲の人をイメージし、点字の表示や点字ブロックがあれば良いとまず考えがちである。しかし、全盲の人また点字の読める人は決して多くはない。何らかの視覚障害をもち、日常生活で困っている人達、ロービジョンの人達は、身体障害者手帳を持っていない人も含めると、100万人にもものぼり、その人達は必ずしも皆白い杖をついているわけではない、ということを知った。

現状では、公共交通機関のさまざまな表示に、ロービジョンの人達への配慮が著しく欠けている。バス停で、駅で、空港で、乗り場の案内や運賃表示や時刻表、エレベーターやトイレの表示、これらの文字やサインが見えにくくて、ロービジョンの人達はどんなに困っていることか!

文字の大きさ、太さ、地の色と対比させた文字の色、サインのかたち、表示が取り付けられる床からの高さ、床と点字ブロックとの色の対比、また表示を補う音声案内、これらがロービジョンの人達への配慮をして、総合的にデザインされてこそ、公共交通機関の表示のユニバーサルデザインといえるのではなかろうか。

■ ソニーのバイオを競売

1998年のUIFA日本大会準備のために事務局で購入したノート・パソコンを会員間で競売にかけることになりました。機種はSONY VAIO PCG-723、中古市場値段は3万円です。購入を希望される方は、氏名・連絡先・入札値段(3万円以上)を記入して事務局宛てファクスして下さい。9月13日必着。

GALLERY

千空間

〒151-0053
東京都渋谷区代々木1-28-1
TEL03-5350-8330
FAX03-5350-7377

貸画廊予約受付中
6日間(金~水) ¥100,000
11:00~19:00木曜休廊



■UIFA 会員の本

●林雅子著

『新・空間の骨格 林雅子のディテール②』
〔ディテール〕12月号別冊 雑誌社刊 定価3,200円

林雅子の最後の出版物となったこの本では、巻頭に「私の建築作法」を述べ、設計にあたっては「空間の骨格を明らかにする」として、その表現方法を、はね出す、折る、吊る、混ぜる、割る、省くの6つにわけ、氏の建築作品を通してその表現方法を紹介しています。

●小谷部育子著

『コレクティブハウジングの勧め』(丸善刊 定価1,800円)

ライフスタイルから住まい方探しの結果出会ったコレクティブハウジング。北欧を中心に近年発達したコレクティブハウジング調査に基づく居住者の生活紹介や歴史、制度、事例紹介などの全貌。住まいのオルタナティブを追求する方には絶好の著書。



■役員会報告

2001年度第2回役員会

日時:5月17日(金)

出席者:中原、小川、松川、田中、東、正宗、山田、渡辺、草野、栗山

- 議事: 1 総務、財務、事業、広報担当からの報告
2 第25回海外交流の会について
3 総会について
4 ウィーン大会について

2001年度第3回

日時:6月18日(木)

出席者:小川、松川、東、正宗、山田、飯島、吉田(洋)、北本、栗山

- 議事: 1 総務、事業、広報担当からの報告
2 第25回海外交流の会総括
3 第9回総会の総括

2001年度第4回役員会

日時:7月26日(木)

出席者:中原、松川、東、正宗、山田、飯島、渡辺、吉田(あ)、北本、草野、田中

- 議事: 1 総務、財務、事業、広報担当からの報告
2 ウィーン大会参加の統括
3 今年度活動について

林・山田・中原設計同人

東京都新宿区南元町 19 信濃町外苑ビル〒160-0012

TEL 03-3353-2275 (代) FAX 03-3353-2426

■広報だより

酷暑にめげずニュースレターの刷新をめざす!会員各位へバトンタッチを!よろしく!(渡辺)大会参加の詳報が続きます。惜しくも参加かなわなかった会員に臨場感を(井出)。暑かった夏を何とかしのいで、灯下親しむ秋に向かいたいです(北本)。

家移りしビルの谷間にひぐらしの声(今村)。広告掲載のお願い開始。とうとう会員のご協力とご紹介(飯島)。初めて参加した海外でのUIFA大会、ソランジュ会長の働きぶりに目をみはりました(編集長:田中)。